HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シベ語の方向を表す格について : -ciと-deを中心に
Author(s)	ジャ, シュン
Citation	研究論集, 13, 137(左)-157(左)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54067
Type	departmental bulletin paper
File Information	008_JIA.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

シベ語の方向を表す格について[1]

―― -ci と -de を中心に ――

郯　　勛

要　旨

本稿は，シベ語における方向を表す格接尾辞 -ci と -de の用法とその使い分けについて考察したものである。

従来の先行研究では，格接尾辞 -ci は方向格，格接尾辞 -de は与位格とそれぞれ位置づけられており，どちらも方向を表す機能を持っていると考えられている。しかし，先行記述のほとんどはごく簡略な記述のみにとどまっており，詳しい分析は行われておらず，そのため，方向を表す格接尾辞 -ci と -de の用法や相違点はまだ明らかにされていない。

そこで本稿では，格接尾辞 -ci と -de にその用法が似ていると思われる日本語の「ヘ格」と「ニ格」を照らし合わせながら，シベ語の方向を表す格接尾辞 -ci と -de の用法・意味機能を明らかにすることを目的として考察を行った。

論文の構成としては，まず先行研究における方向を表す格接尾辞 -ci と -de について概観し，次に日本語の「ヘ格」と「ニ格」を概観する。そして，共起関係と意味機能を分析することにより，方向を表す格接尾辞 -ci と -de の使い分けを明確にすることを試みる。最後に，本稿内容のまとめ，結論とする。

こうした考察により，「方向移動動詞の場合，格接尾辞 -ci 及び -de との共起関係が成り立ち，様態移動動詞の場合，格接尾辞 -de との共起関係は成り立た

[1] 本論文は，2011 年 11 月，北海道大学文学研究科へ提出した博士後期課程の研究論文 I に，加筆・修正を施したものである。本稿執筆にあたり，指導教員である津曲敏郎先生には草稿の段階から指導して頂き，佐々木亨先生，松江崇先生，永山ゆかり先生には貴重なコメントを頂いた。民族言語学ゼミの皆様からも有益な助言を頂き，矢崎春菜氏には日本語の修正を行って頂いた。協力して頂いた方々にこの場を借りてお礼申し上げたい。

また，調査に協力して頂いたコンサルタントの庄声氏，そして調査に応じて頂いた中国新疆ウイグル自治区ウルムチ市に在住する庄声氏のご家族へ，深謝を改めて表明したい。なお，本稿における不備・誤りは，すべて筆者がその責任を負う。

ないが，複合動詞の場合はできる。また，格接尾辞 -ci は未完了アスペクト接尾辞 -mi と現在進行アスペクト接尾辞 -maχei との共起関係が成り立つが，完了アスペクト接尾辞 -Xei との共起関係は成り立たない。そして，格接尾辞 -de は未完了アスペクト接尾辞 -mi と完了アスペクト接尾辞 -Xei との共起関係が成り立つが，現在進行 -maχei との共起が生じることができない。ただし，移動動詞 bedere-「帰る」，meda-「曲がる」は例外として，-ci の場合は完了 -Xei との共起が可能であり，-de の場合は完了アスペクト接尾辞 -Xei のみ共起できる。最後に，方向を表す時，格接尾辞 -ci は移動動作の経路を重視し，格接尾辞 -de は移動動作の目的地あるいは着点に注目する」ということが明らかになった。

1．はじめに

シベ語[2] では，動作の方向を表す際，一般的に格接尾辞 -ci が方向格として用いられるが，幅広い意味を担う与位格の格接尾辞 -de にも，同じく方向を表す機能がみられる。

(1)　miN　　iχiN　　usiN-***ci***　　yave-Xei.
　　1.SG.GEN　　主人　　田畑-DIR　　歩く-PERF
　　「主人は田畑へ歩いた。」　　（李ほか 1984：25）

(2)　cekse　　si　　ya-***de***　　gene-Xei.
　　昨日　　2.SG　　どこ-DAT　　行く-PERF
　　「昨日あなたはどこに行ったの？」　　（朝克 2006：249）

---

[2] シベ語は，主に中国新疆ウイグル自治区を中心に居住する錫伯族によって話されている言語で，話者数はおよそ 2.7 万人である。系統的にシベ語はアルタイ諸言語の中のツングース諸語に属するとされている。
本稿でのシベ語の表記は，久保ほか (2011) の音韻表記に基づく。/＃/は漢語要素の音節境界を表し，/→/は有標の中平イントネーションを表す。また，/X/と/K/はそれぞれ/x/と/χ/，/k/と/q/の対立が中和した原音素を表す。
子音音素：/p，b，t，d，c，j，k，g，q，G，f，s，š，ž，x，χ，m，n，ŋ，N，r，w，y，l/
母音音素：/a，e，i，o，u/
略号：1：1 人称，2：2 人称，3：3 人称，SG：単数，PL：複数，EXCL：除外形，INCL：包括形，GEN：属格，ACC：対格，DAT：与位格，ABL：奪格，IMPF：未完了，PERF：完了，PROG：進行，PART：形動詞，CVB：副動詞，IMP：命令法，OPT：希求法，NMLZ：名詞化，EMPH：強調，TOP：主題
用例：中国語の文献から例文を引用した際には筆者が日本語に訳した。特に出典を記していないものは，筆者が 2011 年 8 月～ 9 月（言語研修会）に採録した調査資料である。

例文(1)(2)において，方向格 -ci と与位格 -de はそれぞれ移動を表す動詞 yave-「歩く」，gene-「行く」の向かっている方向や行く先を表している。

しかし，このような -ci と -de を互いに置き換えて用いることは考えにくい。この点について，従来の先行研究では言及されていないが，共起する動詞やアスペクトと関係があると思われる。

(3) bi taciqu-**ci**/**-de** gene-mi.
1.SG 学校-DIR/-DA 行く-IMPF
「私は学校へ行く。」

一方，例文(3)では，方向格 -ci と与位格 -de は両方とも移動を表す動詞 gene-「行く」の向けられる方向，すなわち「〜に向かって」という意味で用いられており，動作の方向を表している。

そしてこの場合の -ci と -de は，日本語の格助詞「へ」と「に」の用法と非常に似ており，置き換えることが可能であると考えられる。

ただし，上記の例では，-ci と -de はもっぱら完全な意味機能を果たしているとは考えにくく，日本語の格助詞「へ」と「に」と照らし合わせてみると，-ci は人や物が動いていく方向を示し，-de は移動の目的地を表すと推測される。

以上の点をふまえ，本稿では，この二つの格接尾辞 -ci と -de の方向を表す用法と使い分けについて，シベ語の周辺言語（満州語文語，中国語）との関わりも考慮しながら，日本語の格助詞「へ」と「に」に照らし合わせることで，互いの類似点と相違点を明らかにすることを目指す。

2．シベ語の方向を表す格に関する先行研究

2.1 方向格 -ci に関する記述

シベ語の格接尾辞 -ci は，主に動作の方向を表す方向格として用いられる。李ほか（1984，1986），朝克（2006），児倉（2007）などのシベ語に関する研究において，この -ci の方向格としての用法に関して述べられていることは一致している。

そのほかの機能としては，李ほか（1984，1986）によると，-ci は奪格のように比較と分離の対象も表すという。

(4) mese ye#li bira-***ci*** gene-kie!
1.PL.INCL 伊犁 川-DIR 行く-OPT.EMPH
「私たちは伊犁川へ行こう！」 （李・仲 1986：48）

(5) ere bo tere bo-***ci*** deken.

この　家　その　家-DIR　高い
「この家はその家より高い。」　（李ほか 1984：25）

また，例文(5)のように比較の対象として用いられる場合もある。この点について，Tamura (1995：41)では，「この使い方は確かに満州語文語の奪格機能から継承した。しかし，接尾辞 -ci は方向格の使い方と比べて奪格の使い方が少ない」と指摘されている。

2.2　与位格 -de に関する記述

シベ語の与位格 -de は，幅広い意味を担っている。

-de が動作の対象，場所，道具や手段などを表す機能に関しては，李ほか（1984，1986），朝克（1996），児倉（2007）での記述がほぼ一致しており，先行研究によっては，その他にも原因（李・仲 1986；児倉 2007）と時間（児倉 2007）を表す機能があると記述されている。

そして，李ほか (1984，1986) において，-de が動作行為の行われる方向を表すとも指摘されており，李ほか（1984：23，1986：46）以外の研究では，方向を表わす機能に関する明確な記述がされていないものの，談話資料をみてみると，方向を表す機能が用いられている場合がいくつかみられる。

(6)　bitxe　χula-re　jeliN　bo　bei#jiŋe-***de***　gene-mi.
本　読む-IMPF.PART　ために　1.PL.EXCL　地名-DAT　行く-IMPF
「勉強するために私たちは北京に行く。」　（李・仲 1986：107）

(7)　bi　ajige　eriN-***de***　bei#jiŋe-***de***　gene-me　dulu-Xei.
私　小さい　時-DAT　地名-DAT　行く-CVB　過ぎ-PERF
「私は小さいころ北京に行ったことがある。」　（児倉 2007：145）

例文(6)(7)では，-de は移動を表す動詞 gene-「行く」の目的地を表す。すなわち，「〜に行く」という意味，動作「行く」の方向性も含んでいる。

2.3　満州語文語の -ci と -de に関する記述

ここで，シベ語と関わりの強い満州語文語についてもふれておき，シベ語と満州語文語間での相違点について，簡単に述べておきたい。

満州語文語の格体系では，格接尾辞 -ci が奪格，-de が与位格として使用されている。

格接尾辞 -ci に関して，河内（1996：93）は「体言と述語との関係を限定する格助詞のうち，行動の行われる時間，空間の起点を示し，また物と物との比較対照を示す格助詞が奪格である。

奪格を示す格助詞は -ci である」と記述している。また，津曲（2002：36）は「奪格 -ci は時間・空間の出発点（〜から），及び比較の対象（〜より）を示す」と指摘している。

(8) goro ba-***ci*** ji-he antaha.
遠い ところ-ABL 来る-PERF.PART 客
「遠いところから来たお客さんだ。」（津曲 2002：36）

(9) i min-***ci*** se ahūn.
3.SG 1.SG.GEN-ABL 歳 兄
「彼は私より年長です。」（河内 1996：94）

なお，劉（1986）の記述によれば，一般的に満州語文語における方向格は格接尾辞 -de で表されるが，格接尾辞 -ci もまた方向格と呼ばれ，奪格として用いられる場合もあるといい，そして，一つの文の中に格接尾辞 -ci が方向格または奪格として共存することも可能であるという。

(10) ina boo-***ci*** ji-mbi.
甥 家-ABL 来る-IMPF （方向格の機能として）
「甥は家に帰る。」（劉 1986：132）

(10') ina boo-***ci*** ji-mbi.
甥 家-ABL 来る-IMPF （奪格の機能として）
「甥は家から来る。」（同上）

(11) bi cicigar hoton ***ci*** harbin hoton ***ci*** bedere-he.
1.SG 地名 都市 ABL 地名 都市 ABL 帰る-PERF.PART
「私はチチハルからハルビンへ行った。」（同上）

例文(10)(10')では，格接尾辞 -ci がそれぞれ方向格と奪格の二種類の格の機能を持ち，具体的な意味が前後の文脈によって判断される。例文(11)では，-ci が方向格または奪格として共存する例が確認される。

しかし，残念ながら上記のような用法は，今までの段階では(10)(10')(11)以外にまだ確認できていない。そのため，満州語文語の格接尾辞 -ci が方向を表す機能を持つかどうかということについては，この点をふまえて今後の課題とし，今回は保留としたい。

次に格接尾辞 -de についてみてみると，津曲（2002）では，与位格 -de は与格と位置格を合わせたもので，動作の受け手や時間・空間，道具格的な意味，受動文の行為者などを表すと述べられている（津曲 2002：35）。つまり，満州語文語の場合，格接尾辞 -de には与位格のほかに，

方向を表す機能があるという。この点に関しては，Tamura（1995）でも指摘されており，「満州語文語において方向表現は普通に与位格 -de で表される」Tamura（1995：37）と記述されている。

(12) mukden ***de*** gene-mbi.
地名 DAT 行く-IMPF
「瀋陽へ行く。」 （Tamura 1995：37）

このような満州語文語の格接尾辞 -ci と -de について，シベ語の場合と比較してみると，満州語文語の方向を表す格は割と単純で，主に格接尾辞 -de で表されている。

シベ語の場合は格接尾辞 -ci のほうがより方向を表す方向格としての機能をもっていると考えられるのに対し，満州語文語では格接尾辞 -ci よりも格接尾辞 -de のほうが方向格として用いられているということは，一体どのような相違点があるのだろうか。

本稿では，このようなシベ語と満州語文語の相違点もふまえながら，考察を行っていく。

3．日本語のニ格とヘ格

次に，日本語のニ格とヘ格について，先行研究での記述をもとに，どのような機能をもつのかを確認していく。

3.1　奥田（1962）

奥田（1962）は，ニ格をとる句と動詞との関係をまとめたもので，ニ格のかたちをとる名詞と動詞との組み合わせには，１）対象的なむすびつき，２）規定的なむすびつき，３）状況的なむすびつきをあらわしているものがあるという。

そのうち，１）対象的なむすびつきの下位カテゴリーの一つである「ゆくさきのむすびつき」について，次のように述べられている（奥田 1962：291-295）。以下はその内容をまとめたものである。

I　かざりになる名詞は，空間的なニュアンスをもった具体名詞である。かざり名詞が空間的な意味をもたない具体名詞であれば，「〜の方に」「〜のそばに」などのように空間化の手続きをうけるとしている。
かざられになる動詞には，次のようなものがある。

自動詞：*くる，かえる，もどる，でる，にげる，でかける，すすむ，あがる，おりる，*

のぼる，あつまる，おちる，うつる，おもむく，ひきかえす，よる，まわる，かよう，ちがつく，とおざかる，でむく，むかう，はいる

(13) それじゃ，山にいくのは，土曜日にしましょうか。 (奥田 1962：291)
(14) 志野田先生はゆっくりと子どもの方にちかづいていった。 (奥田 1962：292)

方向性をもった移動動詞のグループに入ってくるかさね動詞：

かえっていく，かえってくる，あがっていく，あがってくる，あつまっていく，あつまってくる

状態性の移動動詞（あるく，はしる，かける，はう，とぶ，いそぐ）に「いく」「くる」のようなてつづきで，方向性の移動動詞に入ってくる動詞，及び「こむ」という接尾辞のたすけをかりて，方向性をもった移動動詞：

あるいていく，はっていく，かけてくる，とんでくる，きりこむ，なぐりこむ，ながれこむ，まよいこむ，とびこむ，かけこむ

他動詞：*はこぶ，うつす，くばる，とどける，まわす，おろす，あげる，さげる，おとす，のける，よせる，ちかづける，あつめる，だす*

II 語彙的な意味に空間性をもたない名詞と移動動詞とのくみあわせは，フレジオロジカルないいまわしになっているものがある（たとえは，あたまにくる，手にはいるなど）。

3.2 渡辺（1963）

渡辺（1963）は，ヘ格をとる句と動詞との関係をまとめたもので，ヘ格のかたちをとる名詞と動詞の組み合わせには，１）対象的なむすびつき，２）規定的なむすびつき（その例が非常に少ない）を表しているものがあるという。

そのうち，１）対象的なむすびつきの下位カテゴリーである「ゆくさきのむすびつき」，「くっつきのむすびつき」，「方向のむすびつき」について，次のように述べられている（渡辺 1963：342-347）。以下はその内容をまとめたものである。

I ゆくさきのむすびつき

① 用法の質的・量的な面からいって，ヘ格の名詞と動詞のくみあわせの中では，最も基本的なカテゴリーであるのは，*いく，かえる，かよう，あつまる，うつる*などの方向性をもった移動動詞が空間的なニュアンスをもった，ヘ格の名詞とくみあわさ

ることである。

(15)「春になったら，京都へ夜桜を見に行きましょうか」と彼は言った。
（渡辺 1963：343）

② あるく，とぶ，いそぐのような状態性の移動動詞の場合，*歩いていった，飛んできた* のような複合した形をとることによって，方向性の移動動詞に移行し，ゆくさきのむすびつきをあらわす単語のくみあわせの中にはいってくる。

(16) わたしは，表口を出ると，横手の自転車のおいてある方へ歩いて行った。
（渡辺 1963：344）

③ かざりになる名詞が空間的なニュアンスをもたない場合，「〜の所へ」「〜の方へ」「〜の前へ」「〜の傍へ」などのように空間化のてつづきを受けるのが普通である。

(17) 女のほうは県下の多額納税者の所へ嫁に行った。（渡辺 1963：344）

II くっつきのむすびつき

へ格の名詞と動詞のくみあわせのなかでは，へ格の具体名詞とくっつけ動詞が組み合わさった，くっつきのむすびつきの占める比重が量的かつ質的にかなり大きい。手許の資料では，ゆくさきのむすびつきについて大きいようである。*たつ，とまっている，倒れる，よりかかる，おしつける，おく，うかべる，あてるなど* がある。

(18) わたしは，草の中へ倒れた。（渡辺 1963：346）

III 方向のむすびつき

移動のニュアンスをともなわない動詞とのくみあわせは，移動をともなわない方向だけのむすびつきをあらわしているとしている。

(19) わたしはその方へ顔を向けた。（渡辺 1963：346）

3.3 鈴木（1972）

鈴木（1972）は，ニ格とへ格は移動動作の行き先を表し，その場合，述語になる単語が「いく」「かえる」「かえす」「かよう」「はこぶ」「もどる」「もどす」などの一定の目的地に移動す

る動作をあらわす動詞（移動動詞），及び「はしって　いく」「あるいて　くる」のように「第二なかどめの形＋いく（くる）」のような動詞に限られると述べている（鈴木 1972：102-103）。

さらに，ニ格とヘ格について，古語では到着点と方向というような区別があったが，現代語ではこの区別ははっきりせず，どちらも同じようにもちいられ，しかも，へ格の用法はかなり狭く，ニ格の用法の一部と相当する意味を表すにすぎないと述べられている（鈴木 1972：103，212-213）。

3.4　森田（1982）

森田（1982）では，移動の意味を含んだ動詞の場合，方向・目標を表すニ格とへ格はほとんど同義で，どちらも普通に用いられていると述べられており，一般的な傾向としてへ格のほうが用いられやすい 4 つのパターンを取り上げている（森田 1982：455）。

Ⅰ　会話などで，「行く，出かける」などの動詞を省略する場合。これは動詞を略してしまうため，明確に方向を表す助詞が必要となるためであろう。

(20)　奥様，今日はどちらへ。　（森田 1982：455）

Ⅱ　目標が遠く離れている感じを表す場合。

(21)　一度，あの海の向こうへ行ってみたい。　（森田 1982：455）

Ⅲ　その移動動作の経過を重んじた表現をする場合。

(22)　彼はダダダダと 2 階へ上がった。　（森田 1982：455）

Ⅳ　文中に他の意味で用いられた助詞「に」がある場合。これは「に」の重なりを避けるという表層的理由からであろう。

(23)　私は去年の 5 月に日本へ来た。　（森田 1982：455）

さらに，森田（1982）では，「助詞「の」の前に「に」をおいた「にの」の形は用いられない。この場合は「への」に変えなければならない。」（森田 1982：455）と指摘している。

4．方向を表す格接尾辞 -ci と -de の分析

1．でも簡単にふれたが，シベ語では方向を表す機能をもつ格接尾辞 -ci と -de の使い分けには，共起する動詞やアスペクトと関係があると思われる。

そこで，まずは格接尾辞がつく動詞について，どのようなものがどのような関わりをもっているのかをみていく。

4.1　移動動詞

『言語学大辞典』（亀井・河野・千野 1996）によると，動詞はアスペクトの観点から，目標点（限界点）をもつ特徴（北原（1998：15）では「限界性（Telicity）」とよんでいる）を基準に，目標動詞（telic verb）と非目標動詞（atelic verb）に区分できるという（亀井•河野•千野 1996：1011）。

ここでは，この目標動詞と非目標動詞の区分を参考に，移動動詞についてみていく。

ただし，シベ語の場合，このような動詞の区分に関する先行研究がないため，今回はまずは比較対象である日本語と，シベ語への何かしらの影響が考えられる中国語の移動動詞についてみていき，そこからシベ語の移動動詞についての考察を行う。

4.1.1　日本語の移動動詞

北原（1998）は，「「限界動詞」（telic verb）は「割る」「死ぬ」のように，動詞の表す運動が必然的に終了する限界点（terminative point）も持ち，限界点を超えなければその運動が成立したとは言えない動詞である。「非限界動詞」（atelic verb）は，「殴る」「働く」のように，いつどこで終わっても動詞の表す運動が成立したと言える，したがって，限界点を持たない動詞である」（北原 1998：15-16）と指摘している。

ここで扱う日本語の移動動詞について，この区分を該当させると次のようになる（工藤 1995：73-78，北原 1998 参照）。

限界動詞：行く，来る，出る，入る，戻る，上がる，移る……
非限界動詞：歩く，走る，泳ぐ，這う，飛ぶ，動く，急ぐ……

前者は主体の位置変化を表す「方向移動動詞」であり，後者は移動に伴う様態を表す「様態移動動詞」に相当する。

4.1.2　中国語の移動動詞

中国語に関する記述としては，ヤーホントフ（1987）があげられる。

ヤーホントフ（1987：129-131）も 4.1.1 と同様に，アスペクトに基づいた「有限動詞」「無

限動詞」という立場から動詞が二分されている。その中から移動動詞を取り上げると，次のようになる。

有限動詞：来「来る」，出「出る」，进「入る」，掉「落ちる」……
無限動詞：走「歩く」，跑「走る」，飞「飛ぶ」……

4.1.3　シベ語の移動動詞

4.1.1 と 4.1.2 の内容を参照しながらシベ語の場合について考えてみると，アスペクト的見地から，シベ語の移動動詞も，限界性に基づいて「限界動詞」と「非限界動詞」に区分できると思われる。

このように移動動詞は，意味的に前者の「方向を有する動詞」（即ち方向移動動詞）と後者の「移動様態を表す動詞」（即ち様態移動動詞）と大きく区分することができるだろう。統語的な意味上，経路との関係において方向移動動詞は「起点•着点指向」であり，様態移動動詞は「中間経路指向」である。

したがって，シベ語の移動動詞は以下のように分類できる。

方向移動動詞：gene-「行く」，ji-「来る」，bedere-「帰る」，dyosi-「入る」，tici-「出る」，meda-「曲がる」，Game-「持っていく，連れて行く」，Gaje-「持ってくる」，guri-「移る」，tawene-「上がる」，uwu-「降りる」
様態移動動詞：yave-「歩く」，feksi-「走る」，dei-「飛ぶ」，efse-「泳ぐ」，ei-「流れる」，ketkene-「跳ぶ，ジャンプする」

4.2　動詞との共起

次に，4.1.3 で分類した主体の位置変化を表す「方向移動動詞」，及び移動に伴う様態を表す「様態移動動詞」が，格接尾辞 -ci と -de に，それぞれどのように共起するのかを考察していく。

4.2.1　方向格 -ci

方向格 -ci は，直後または文末における動詞を表す動作が向けられる方向を示す格接尾辞である。文献の例文に観察すると，方向格 -ci と共起する動詞には yave-「歩く」，gene-「行く」，bedere-「帰る」などの移動動詞が頻繁に用いられるという傾向がみられる。

4.2.1.1　方向移動動詞

シベ語の方向移動動詞は gene-「行く」, ji-「来る」, bedere-「帰る」, meda-「曲がる」, Game-「持っていく，連れて行く」，guri-「移る」などがある。これらの動詞は，それ自体が方向を有することから，統語上の意味は「起点・着点指向」である。

(24) A：si　　yawa-***ci***　　***gene-***mi.
2.SG　　どこ-DIR　　行く-IMPF
「あなたはどこへ行くの？」
B：bi　　sefe-i　　bo-***ci***　　***gene-***mi.
1.SG　　先生-GEN　　家-DIR　　行く-IMPF
「私は先生の家に行く。」

(25) bi　　te　　ja#χwaŋe-***ci***　　***bedere***-maχei.
1.SG　　今　　札幌-DIR　　帰る-PROG
「私は今札幌へ帰っている。」

(26) sirame　　moN　　bo-***ci***　　***ju*** →
今度　　1.PL.GEN　　家-DIR　　来る-IMP
「今度私たちの家に来なさい。」

(27) ere　　joχuN-we　　tewa-***ci***　　***meda***.
この　　道-ACC　　そこ-DIR　　曲がる-IMP
「この道をそこへ曲がってください。」

(28) bi　　miN　　yonχuN-we　　ye#ywaN-***ci***　　***Game***-mi.
1.SG　　1.SG.GEN　　犬-ACC　　病院-DIR　　連れて行く-IMPF
「私は私の犬を病院に連れて行く。」

(29) jidere ani　　bi　　ewa-deri　　eme　　amqeN　　bo-***ci***　　***guri-***ki →
来年　　1.SG　　ここ-ABL　　一　　少し大きい　　家-DIR　　移る-OPT
se-me　　Goni-maχe-ŋe.
と　　考える-PROG-NMLZ
「来年私はここから少し大きい家に移ろうと思うのですが。」

(30) gwaNse-***ci***　　***yave***-kie.
レストラン-DIR　　出発する-OPT.EMPH
「レストランへ行こう！」

4.2.1.2　様態移動動詞

シベ語の様態移動動詞は yave-「歩く」，feksi-「走る」，dei-「飛ぶ」，efse-「泳ぐ」などがある。これらの動詞は，それ自体に方法性が含まれていないため，方向を表す格接尾辞 -ci との結び付きによって，明確な方向を表現されることになる。統語上の意味は「中間経路指向」である。

(31) miN　　iχiN　　usiN-**ci**　　***yave***-Xei.
1.SG.GEN　　主人　　田畑-DIR　　歩く-PERF

「主人は田畑へ行った。」　（李ほか 1984：25）

(32) tere-**ci** ***yave***-maqe, ju gya-we dulu-me
あそこ-DIR 歩く-PROG.PART 二 街-ACC 過ぎる-CVB
syolχo erxi-**ci** ***meda.***
左 側-DIR 曲がる-IMP
「あそこへ行き，二つの道を渡って左へ曲がって！」　（朝克 2006：268）

(33) siN nuN tewa-**ci** ***feksi***-Xei.
2.SG.GEN 妹 あそこ-DIR 走る-PERF
「あなたの妹はあそこへ走った。」

例文(31)の中国語訳をみてみると，「我丈夫往地里去了」とある(李ほか 1984：25)。この「往」は，介詞として方位詞や場所を表す語と介詞句を作り，動作がある方向に向かって移動するという意味である。

例文(32)は，道案内をしている場面で，指している「あそこ」の方向へ歩くという状況を想定できるとすると，方向格 -ci の直後における様態移動動詞 yave-「歩く」の方向性が明らかであると考えられる。

また，例文(32)(33)では，-ci が中間経路を重視していると思われる。

4.2.2　与位格 -de

与位格 -de が方向を表す場合についても同様に，文献の例文及び筆者が採録資料から観察すると，動詞 gene-「行く」，bedere-「帰る」，ji-「来る」，Game-「持っていく，連れて行く」など方向移動動詞と共起する例文が確認できた。

その中でも，gene-「行く」，ji-「来る」との複合動詞の例が目立っている。

4.2.2.1　方向移動動詞

方向移動動詞は，それ自身でも主体の位置変化を表している，つまり，方向移動動詞が方向性を有するから，与位格 -de は動作が向けられる方向を示すことができる。

この場合は，移動主体が着点へ到達することを表している。

(34) cekse si ya-**de** ***gene***-Xei.
昨日 2.SG どこ-DAT 行く-PERF
「昨日あなたはどこに行ったの？」　（朝克 2006：249）

(35) bi erde-i nadci eriN-de taciqu-**de** ***gene***-mie.
1.SG 朝-GEN 七番目 時-DAT 学校-DAT 行く-IMPF.EMPH
「私は朝七時に学校に行く。」　（同上：252）

(36) tese　　bitχe-we　　miN**-de**　　***Gaje***-me　　bu.
3.PL　　本-ACC　　1.SG.GEN-DAT　　持ってくる-CVB　　くれる-IMP
「それらの本を私のところに持ってきて！」　　(同上：264)

(37) sirame　　moN　　bo**-de**　　***ju*** →
今度　　1.PL.GEN　　家-DAT　　来る-IMP
「今度私たちの家に来なさい。」

(38) bi　　jai　　ani-ni,　　bei#jiŋe**-de**　　***ge□se-me***　　***gene-mi.***
1.SG　　再び　　年-TOP　　北京-DAT　　観光する-CVB　　行く-IMPF
「私は来年に北京へ観光に行く。」

例文(35)において，格接尾辞 -de は動詞 gene-「行く」の向けられる方向，すなわち「〜の方へ」という意味で，動作の方向を表している。従って格接尾辞 -ci とお互いに置き換えるころが可能ではないかと思われる。

しかし，例文(34)では cekse「昨日」という過去のことを言うとき，動作の方向性より着点を示しているから，論理的には -ci より -de のほうがふさわしいと考える。

4.2.2.2　様態移動動詞

yave-「歩く」，feksi-「走る」，dei-「飛ぶ」，efse-「泳ぐ」などの様態移動動詞は，それ自体に方向性が含まれておらず，目的語との間では「〜の方へ」という要素がないと，直接着点を示すことができない。

そして，与位格 -de は本来位置を表すもので，動詞自体が「方向性」を持たないと，-de の「動作が行われる方向」という意味も失ってしまうと思われる。

(39) miN　　iχiN　　usiN**-ci** /****-de***　　***yave***-Xei.
1.SG.GEN　　主人　　田畑-DIR/*-DAT*　　歩く-PERF
「主人は田畑へ行った。」　　(李ほか 1984：25)

従って，例文(39)のように方向格 -ci しか使わない。

4.3　アスペクトとの共起

4.3.1　方向格 -ci

シベ語には，アスペクト(終止形)として，完了 -Xei，未完了 -mi と現在進行 -maχei がある。ここでは，格接尾辞 -ci とアスペクトとの共起について考察していく。

(40) A. bi taciqu*-***ci***/**-de** gene-Xei.
1.SG 学校-*DIR*/-DAT 行く-PERF
「私は学校へ行った。」
B. bi taciqu**-ci**/**-de** gene-mi.
1.SG 学校-DIR/-DAT 行く-IMPF
「私は学校へ行く。」
C. bi taciqu**-ci**/*-***de*** gene-maχei.
1.SG 学校-DIR/-*DAT* 行く-PROG
「私は学校へ行く。」

(41) A. tere jiŋe#du**-ci**/**-de** bedere-Xei.
3.SG 京都-DIR/-DAT 帰る-PERF
「彼は京都へ帰った。」
B. tere jiŋe#du**-ci**/*-***de*** bedere-mi.
3.SG 京都-DIR/-*DAT* 帰る-IMPF
「彼は京都へ帰る。」
C. tere te jiŋe#du**-ci**/*-***de*** bedere-maχei.
3.SG 今 京都-DIR/-*DAT* 帰る-PROG
「彼は今京都へ帰っている。」

例文(40)から分かるように，方向を表す格接尾辞 -ci は未完了 -mi，現在進行 -maχei との共起関係が成り立つが，完了 -Xei との共起が想定できない。

また，例文(41)では，格接尾辞 -ci はすべてのアスペクト接尾辞との共起関係があるという現象がみられる。

(42) bi Gulja*-***ci***/**-de** jaqe-we gya-me gene-Xei.
1.SG グルジャ-*DIR*/-DAT もの-ACC 買う-CVB 行く-PERF
「私はグルジャへものを買いに行った。」

例文(42)では，例文(40)と同じく，格接尾辞 -ci は完了 -Xei との共起できないということがみえる。

筆者の採録データから観察したところ，基本的に格接尾辞 -ci は完了アスペクト -Xei との共起がみられなかった。ただし，bedere-「帰る」，meda-「曲がる，帰る」，guri-「移る」の 3 つの動詞は格接尾辞 -ci との相性が良いそうで，例外となる。

yave-「歩く」ような様態移動動詞の場合，動詞自体には方向性が含まれないため，方向を表す際，すべてのアスペクトが方向格 -ci をとる必要がある。

様態移動動詞と例外となる 3 つの方向移動動詞を除き，方向格 -ci はアスペクトの未完了 -mi と現在進行 -maχei との共起関係が成り立ち，完了 -Xei との共起関係は成り立たない。

4.3.2　与位格 -de

次に，格接尾辞 -de とアスペクト（終止形）の完了 -Xei，未完了 -mi，現在進行 -maχei との共起について考察していく。

ここでは，前節における格接尾辞 -ci とアスペクトを表す接尾辞との共起を対照しながら，検証していく。

(43) A. bi　taciqu*-***ci***/-**de**　siwe　gisuN-we　taci-me　gene-Xei.
1.SG　学校-*DIR*/-DAT　シベ　言葉-ACC　勉強する-CVB　行く-PERF
「私は学校へシベ語を勉強に行った。」

B. bi　taciqu*-***ci***/-**de**　siwe　gisuN-we　taci-me　gene-mi.
1.SG　学校-*DIR*/-DAT　シベ　言葉-ACC　勉強する-CVB　行く-IMPF
「私は学校へシベ語を勉強に行く。」

C. bi　taciqu-**ci**/*-***de***　siwe　gisuN-we　taci-me　gene- maχei.
1.SG　学校-DIR/-DAT　シベ　言葉-ACC　勉強する-CVB　行く-PROG
「私は学校へシベ語を勉強に行く。」

(44) A. tere　jiŋe#du-**ci**/-**de**　bedere-Xei.
3.SG　京都-DIR/-DAT　帰る-PERF
「彼は京都へ帰った。」

B. tere　jiŋe#du-**ci**/*-***de***　bedere-mi.
3.SG　京都-DIR/-*DAT*　帰る-IMPF
「彼は京都へ帰る。」

C. tere　te　jiŋe#du-**ci**/*-***de***　bedere-maχei.
3.SG　今　京都-DIR/-*DAT*　帰る-PROG
「彼は今京都へ帰っている。」

例文(43)から分かるように，格接尾辞 -de は，アスペクトの未完了 -mi と完了 -Xei との共起関係が成り立つものの，現在進行 -maχei のアスペクト接尾辞との共起が想定できない。

例文(44)では前節でみたように，移動動詞 bedere-「帰る」は，すべてのアスペクト接尾辞と方向格 -ci との共起関係が成り立っているのに対し，格接尾辞 -de は完了 -Xei 以外との共起が認

められない。

(45) A. bi Gulja*-***ci***/**-de** jaqe-we gya-me gene-Xei.
1.SG グルジャ-*DIR*/-DAT もの-ACC 買う-CVB 行く-PERF
「私はグルジャへものを買いに行った。」
B. bi Gulja*-***ci***/**-de** jaqe-we gya-me gene-mi.
1.SG グルジャ-*DIR*/-DAT もの-ACC 買う-CVB 行く-IMPF
「私はグルジャへものを買いに行く。」
C. bi Gulja-**ci**/*-***de*** jaqe-we gya-me gene-maχei.
1.SG グルジャ-DIR/-*DAT* もの-ACC 買う-CVB 行く-RROG
「私はグルジャへものを買いに行く。」

例文(45)からみると，格接尾辞 -de は例文(43)(44)と同じく，現在進行 -maχei との共起はできない。ほかの採録データから観察しても，格接尾辞 -de は現在進行アスペクト -maχei との共起ができないものと考えられる。

未完了 -mi と完了 -Xei は格接尾辞 -de と共起できるが，移動動詞 bedere-「帰る」の未完了形 bedere-mi は格接尾辞 -de と共起できるは考えにくく，移動動詞 bedere-「帰る」の場合は，完了 -Xei しか共起できない。

以上の例から，格接尾辞 -de は移動動詞 bedere-「帰る」を除き，アスペクト接尾辞の未完了 -mi と完了 -Xei との共起関係が成り立つが，現在進行 -maχei とはどのような状況においても共起関係が成り立たないことが確認できた。

また，(43-B) と (45-B) のように，現在進行アスペクト -maχei 以外は，述語動詞が複合動詞の場合，与位格 -de しか共起できない。

4.4 方向を表す格接尾辞 -ci と -de の使い分け

以上の分析と採録データを踏まえながら，方向を表す格接尾辞 -ci と -de の共通点・相違点がいったいどこにあるかという問題について，格接尾辞 -ci と -de の使い分けに関する考察を試みる。

4.4.1 共起関係

上の分析をみたように，方向を表す格接尾辞 -ci はアスペクトの未完了 -mi と現在進行 -maχei との共起関係は成り立つが，完了 -Xei との共起関係は成り立たない。そして，格接尾辞 -de はアスペクト接尾辞の未完了 -mi と完了 -Xei との共起関係は成り立つが，現在進行 -maχei との共起関係は成り立たない。

ただ，移動動詞 bedere-「帰る」，meda-「曲がる」など動詞と共起した場合，格接尾辞 -ci は完

了 -Xei のアスペクト接尾辞を取りうるが，この時の表現では移動する方向・経路が注目される。格接尾辞 -deは 移動動詞 bedere-「帰る」の場合，完了 -Xei のアスペクト接尾辞しか共起できない。

また，4.2.2.2 で述べたように，様態移動動詞はそれ自体に方向性が含まれておらず，着点・方向を表すため，与位格である -de との共起はできない。

つまり，まとめると下記の表になる。

表 1　格接尾辞 -ci/-de と動詞の共起

	方向移動動詞	様態移動動詞
-ci	○	○
-de	○	×

（○：可能，×：不可能）

表 2　格接尾辞 -ci/-de とアスペクトの共起

	完了 -Xei	未完了 -mi	現在進行 -maχei
-ci	×	○	○
-ci bedere-/meda-	○	○	○
-de	○	○	×
-de bedere-/meda-	○	×	×

（○：可能，×：不可能）

また，格接尾辞 -ci より格接尾辞 -de は複合動詞が共起する例が目立った。

(46)　joru　o-ci　da,　eNbade　mederi-**de**/****-ci***　efse-me　gene-ki →
　　夏　なる-CVB　EMPH　一緒に　海-DAT/-*DIR*　泳ぐ-CVB　行く-OPT
　　「夏になったら，一緒に海に泳ぎに行こう。」

例文(46)において，格接尾辞 -de は mederi「海」の後に付加して，複合動詞 efse-me gene-ki「泳ぎに行く」の行く場所を表す。4.2.2.2 で述べたように様態移動動詞は -de と共起すると直接着点を示すことができないが，複合動詞になると格接尾辞 -ci より -de のほうが自然である。

4.4.2　意味機能

シベ語の格接尾辞 -ci と -de の意味機能の相違点について，まず下の例文を観察する。

(47)　bi　taciqu-**ci**/**-de**　gene-mi.
　　1.SG　学校-DIR/-DAT　行く-IMPF

「私は学校へ行く。」

例文(47)では，述語動詞は方向移動動詞であるため，未完了アスペクト接尾辞 -mi と共起すると，格接尾辞 -ci と -de は，いずれも移動の方向や着点を表す。つまり，格接尾辞 -ci は人と物が動いていく方向を示すが，方向と目的地を示す -de と区別なく使うことができ，人や物が動いていく方向を表せば，-ci と -de を置き換えることが可能であると考えられる。

ただし，例文（47）の「学校」は行く先ではなく，「学校」へ向かって行くというニュアンスを表す場合，-de より -ci のほうがもっと相応しいだろう。そこで，「学校」は行く先（着点）である場合，意味的には -de のほうが明確だったと考えられる。つまり，-ci は動作の方向性を強調しているが，-de は動作の着点を強調している。

（48）	miN	iχiN	usiN-**ci**/*-***de***	yave-Xei.	
	1.SG.GEN	主人	田畑-DIR/-*DAT*	歩く-PERF	
	「主人は田畑へ行った。」				（李ほか 1984：25）

例文(48)では，述語動詞は様態移動動詞 yave-「歩く」であるため，このような動詞自体には方向性は含まれておらず，目的語との間では「〜の方へ」という要素がないと，直接着点を示すことができない。与位格 -de は本来位置を表すもので，動詞自体「方向性」が持たないと，-de の「動作が行われる方向」という意味も失ってしまうと思われる。したがって，この文は -de を使うと，不成立となる。この点についてコンサルタントの方に確認したところ，例文（48）の場合は確かに -ci しか使わないということが分かった。

要するに，接尾辞 -ci と -de が方向移動動詞と共起すると，移動の着点や方向を表す場合，意味上に大きな相違はみられない。しかし，-ci と -de がそれぞれ強調する部分はやや異なると考えられる（図 1 参照）。

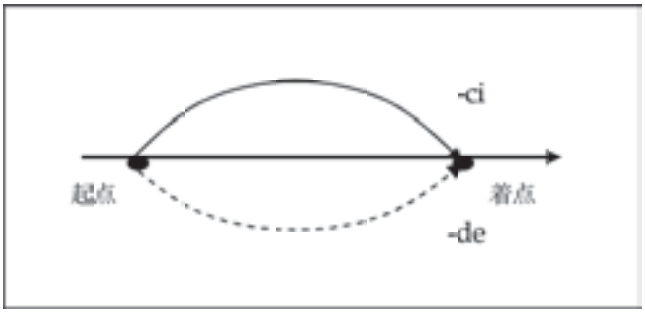

図 1

図 1 において，左端の点は動作行為の起点を，右端の二つの矢印が向かうところは動作行為の着点をそれぞれ表している。そして，上下の二つの線はそれぞれ格接尾辞 -ci と -de を表し，-de は点線，-ci は経路を重視した表現であることを強調するため実線で示されている。

つまり，格接尾辞 -ci と -de は両方とも方向を表す機能を持っているが，そのうち，移動の経路に注目した場合は -ci を使うのに対し，移動の目的地あるいは着点に注目した場合は -de を用いる。また，方向移動動詞の場合，格接尾辞 -ci 及び -de との共起関係が成り立つが，様態移動動詞の場合，格接尾辞 -de との共起関係が成り立たない。

5．おわりに

本稿では，シベ語の方向を表す格接尾辞 -ci と -de について考察し，その分析を試みた。その結果は，以下のようにまとめられる。

まず，日本語の移動動詞と中国語の移動動詞を参照しながら，シベ語の移動動詞を「方向移動動詞」と「様態移動動詞」を大きく区分した。そして，方向を表す格接尾辞 -ci，-de とその移動動詞が共起する場合を観察したところ，その方向性の有無によって，文の成立に次のような差異がみられた。

a．**-ci**/**-de**　＋　方向移動動詞

b．**-ci**/*-***de**　＋　様態移動動詞

そのほか，複合動詞文には，格接尾辞 -ci より格接尾辞 -de の方が好まれる傾向がある。様態移動動詞の場合，格接尾辞 -de との共起関係が生じることができないが，複合動詞の場合はできる。

次に，方向を表す格接尾辞 -ci，-de とアスペクトが共起する場合について考察したところ，格接尾辞 -ci は，未完了アスペクト接尾辞 -mi と現在進行アスペクト接尾辞 -maχei との共起関係が成り立つが，完了アスペクト接尾辞 -Xei との共起関係は成り立たない。そして，格接尾辞 -de は未完了アスペクト接尾辞 -mi と完了アスペクト接尾辞 -Xei との共起関係が成り立つが，現在進行 -maχei との共起は成り立たない。ただし，移動動詞 bedere-「帰る」，meda-「曲がる」は例外として，-ci の場合は完了 -Xei との共起が可能であり，-de の場合は完了アスペクト接尾辞 -Xei のみ共起できる。

最後に，格接尾辞 -ci と -de の意味機能について考察してみたところ，-ci と -de は両方とも方向を表す機能を持っているが，格接尾辞 -ci は移動動作の経路を重視し，格接尾辞 -de は移動動作の目的地あるいは着点に注目していた。また，-ci と -de は方向移動動詞の未完了アスペクト接尾辞 -mi と共起する場合，人や物が動いていく方向を表せば，置き換えることができた。

本稿におけるシベ語の方向を表す格接尾辞 -ci と -de についての考察は，主に移動動詞の種類と動詞アスペクトの共起関係について検討したものであり，-ci と -de の前にどんな名詞類語彙に付くことができることを取り扱わなかった。記述をより正確にするために，今後は大量なデータを収集しもっと詳しく考察する必要があると考えられる。

（じゃ　しゅん・歴史地域文化学専攻）

参考文献

奥田靖雄（1962）「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編（1983 版に所収）『日本語文法・連語論（資料編）』281–323．むぎ書房（1989 年第 2 刷）

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大辞典：6（術語編）』三省堂

河内良弘（1996）『満洲語文語文典』京都大学学術出版会

北原博雄（1998）「移動動詞と共起するニ格句とマデ格句 ── 数量表現との共起関係に基づいた語彙意味論的考察 ──」『国語学』195 集 15–29．国語学会

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト ── 現代日本語の時間の表現 ──』ひつじ書房（2002 第 3 刷）

久保智之・児倉徳和・庄声（2011）『シベ語基礎』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

久保智之・児倉徳和・庄声（2011）『シベ語語彙』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

児倉徳和（2007a）「シベ語」中山俊秀・山越康裕（編）『文法を描く 2：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』：131–157，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

C. E. ヤーホントフ（1987）『中国語動詞の研究』（橋本萬太郎　訳）白帝社

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房（1975 年第 4 刷）

津曲敏郎（2002）『満州語入門 20 講』大学書林

森田美富子（1982）「「に」と「へ」〈目的の場所・方向〉」日本語教育学会編『日本語教育事典』455．大修館書店

渡辺友左（1963）「へ格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会編（1983 版に所収）『日本語文法・連語論（資料編）』281–323．むぎ書房（1989 年第 2 刷）

朝克（2006）『現代錫伯語口語研究』北京：民族出版社

李樹蘭・仲謙（1986）『錫伯語簡誌』北京：民族出版社

李樹蘭・仲謙・王慶豊（1984）『錫伯語口語研究』北京：民族出版社

劉景憲（1986）「自習満語教材（三）」『満語研究』1986 年 2 期 120–140

Tamura, Ken’ichi（1995）〝The Case Suffix *-ci* in Sibe Manchu Texts〞『名城商学』第 44 巻別册抜刷：35–51，名城大学商学会